

---

---

# NPOサーベイ会報

2010-11年 活動報告号

Volume 2

---

---

## ごあいさつ

松尾 浩一郎

会員みなさん、いつもサーベイの活動をサポートしていただきましてありがとうございます。心より感謝申し上げます。

これまで2年間、やや行き当たりばったり気味に活動をしてきましたが、年に3回程度のイベントを開催し、ひとつかふたつの調査プロジェクトに参加する、という感じで歩んでいます。今後どうなるかはわかりませんが、どうにかわれわれなりのペースが見えてきたように思います。

初年度は役員だけの小さいサークルのような観がありました。活動を手伝ってくれる仲間もできました。こうした仲間の広がりも大切にしながら、3年目も楽しく有意義な活動を進めていきたいと思っています。

社会調査をめぐる環境は明るいとは言いきれませんが、大学や学会といった組織も、やはり難しい問題をたくさん抱えているように見えます。そのような中であって、あくまでもポジティブに社会調査に関わってほしいと願い、そのための拠点となるようサーベイの集まりを続けてきました。

サポートして下さる方々の期待に応えるためにも、もう少し活発にいろいろなことをしたいと思うこともあります。けれども現実的には、サーベイとして集まれる機会はあまり多くはありません。さきほど拠点と書きましたが、実際にはむしろ秘密基地のようなものになっているのかもしれませんが。

しかしもし子どもの頃に裏山につくった秘密基地のように、日常性から少し離れてドキドキできる空間になれるなら、それはとても素敵なことだとも思います。

あの頃の裏山の基地には仲の良い友だち以外は入れてあげませんでした（すぐも飽きてしまったのはそのせいかもしれません）。そうではなく、調査に関心をもつ人なら誰でも集まれる出入り自由な場所になれば、広く愛される秘密基地になれるかもしれません。そんなことを夢想しています。

いろいろ舵取りは難しいですが、サーベイができること、サーベイにしかできないことが何であるかを考えながら、これから進む先を見つけていきたいと思っています。もし企画案などのご提案やご意見などがあれば、ぜひお寄せください。今後ともよろしく願います。

## 2周年に寄せて

大島 千帆

この夏でサーベイの活動は2周年を迎えました。ひとえにご支援くださったみなさま、見守ってくださったみなさまのお力添えあつての2周年だと思っています。心より感謝申し上げます。

3月11日の地震の際、みなさまはどうされていたでしょうか？ 私はまさにインタビュー調査の最中でした。その後数か月は高齢者宅の調査どころではなく、日常あつてこそその調査なのだと思います。知らされました。

さて、この1年もサーベイの活動を振り返ってみますと、いろいろな思いが去来します。

様々な方と関わることによって新しい気づきがあり、世界が広がるようなわくわくする瞬間が何度もありました。その反面、「誰もが自分と同じような気持ちで社会調査に向き合っているわけではない」ということに改めて気付かされ、足元がすくみそうになる時もありました。

物事には常に表と裏があると思います。人の心や体は、調子が良い時もあればそうでない時もあると思います。

ポジティブな面もネガティブな面もひっくるめて社会調査を抛り所をした議論が活発化することを願っています。現在 NPO サーベイに求められている役割は、こうした議論の「場」を提供することだと思っています。

小さな小さな NPO ですが、地味だけれども懐の深い活動にしていきたいと考えています。今後ともご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

## デモクラシーの深化と拡がりのための社会調査

——NPO サーベイ設立 2 周年に際して

小倉 康嗣

おかげさまで、NPO サーベイは満 2 歳の誕生日を迎えることができました。それもこれも、みなさまのご理解とご支援のおかげです。厚く厚くお礼申し上げます。

わたしたちのような弱小 NPO が細々とでも継続できているのは、ひとえにみなさまのご理解とご支援のおかげですが、それと同時に、やはりこのような場が求められているからなのではないかと、イベント（研究会）の熱気からも感じております。「このような場」とは、社会調査をめぐるさまざまな立場の人びと（調査をする人、される人、される人からする人になった人、される人

であるのと同時にする人でもある人、調査テーマや調査という営みそれ自体に関心がある人 etc.) が相互に対話し、熟議できる場です。

いささか大きな話になってしまって恐縮ですが、いま世の中は、人びとの共通前提となっていた「大きな物語」が解体し、グローバル化と個人化に引き裂かれていく歴史的社会的状況にあるといえましょう。雇用の流動化や家族のありかたの変化、それにとまなう生活やつながりのありかたの不安定化、生きる意味のゆらぎなど、既存のカテゴリーや枠組では捉えきれない（どう声をあげてよいかわからない）新たな生のリスクや生きづらさが噴出しています。また、3.11 の大震災は、私たちが自明の前提としているものが決して自明ではないことを、まざまざと突きつけました。

そういった既存のカテゴリーや枠組では捉えきれない現実を適切に捉え、記述し、公的な問題にしていく営みが、社会調査にするべく要請されているといえましょう。そしてその営みは、どう声をあげてよいかわからずに立ちすくんでいるさまざまな立場の人たちと、試行錯誤しながら協働的にやっていかなければなりません。対話と熟議によるデモクラシーの深化と拡がりが、社会調査に求められてくるゆえんです。

わたしは、NPO サーベイというささやかな場が、そのきっかけになればと願っています。NPO サーベイが、「協働行為としての社会調査」づくりの現場として、みなさまに豊かに育てられていきますように。

今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

## 刺激の場であり、癒しの場である「NPO サーベイ」

上村 勇夫

私が初めて NPO サーベイの研究会に参加させていただいてから約 1 年半、役員という形で携わるようになってから約 1 年が経ちました。そ

の間、研究会で発表もさせていただきましたし、先日は企画立案にも携わらせていただきました。この会に参加すると必ず心地がいい刺激を受けることができ、それによっていつも癒しの気分が味わえる、そんな感覚を持っております。

私にとっての日々の研究活動は、好奇心や向上心を満たしてくれるとてもやりがいのある表現の場である反面、悩みや迷いに躓くことの多い苦難の道でもあります。研究会で発表させていただいた時もちょうど修士論文の作成中で、最も私が煩悶していた問題は、調査協力いただけた方々に対していかに論文を通して恩返しができるかということでした。そんな時に発表のチャンスをいただきました。研究会には所属も分野も違う様々な方々が参加され、研究者としては私よりも経験豊富な先輩方ばかりでしたので、胸を借りるつもりであるがままの自分を吐露させていただきました。それに対し、鋭いご指摘や「なるほど～」と唸られるようなアイデアをたくさんいただき、大変参考になりました。しかし、私が最も印象に残っていることとしては、みなさんも同じように悩みや迷いを持ち、それに対して“愚直”なまでに正面から向き合い、足踏みをし、創意工夫をされていることが垣間見られたことでした。それにより私は「研究とはこうだ」といった固定観念や、「エビデンスを出さなければいけない」といった縛りから解き放たれ、視野が広がっていく自分を感じました。「あ～、みんな同じように悩んでいるんだあ」「そういう考え方もあるんだ」、そんな安心感をいただきました。

改めて、研究会にご参加されたみなさま、またNPOサーベイを陰で支えていただいているみなさまに感謝したいと思います。この会の、ある意味とても緩いつながりがとても好きです。これからも私なりにこの会に貢献できればと思っています。みなさま今後ともよろしく願いいたします。

\* \* \* \* \*

## イベントの記録(1)

2010年12月4日 於立教大学池袋キャンパス  
《調査実習という経験——

調査は研究者のためだけのもの?》

ゲストスピーカー：

石川良子（実習担当者）

青木海（元実習メンバー／卒業生）

工藤将充（元実習メンバー／卒業生）

黒野亜由美（元実習メンバー／4年生）

前田雅俊（元実習メンバー／4年生）

企画趣旨：

社会調査士資格も創設され、研究者になるわけでもなく社会調査を学ぶ人が多くなりました。では、そうした人びとにとって、調査をするという経験はどんな意味をもっているのでしょうか。それを考えることは、社会調査そのものの意味、さらには社会のなかの社会調査ということ、ひろく・ラディカルに問うことにつながっていくでしょう。

そこで、今回のイベントでは、一年間の調査実習を経験し、現在は社会人として活躍されている方を中心とした元実習メンバーと、その担当者をお呼びして、彼・彼女らの声に耳を傾けてみたいと思います。

お呼びするのは、明治学院大学で社会調査実習を担当されている石川良子さんと、その元実習メンバー4人の方々です。

石川さんは「一年という時間をかけて、ちゃんと人と会うこと」を大事にされ、元実習メンバーの方々も、つまりいたり挫折したりしながらも、途中で諦めることなく最後までそれを実践しつづけました。

それは、いったいどんな経験だったのでしょうか。元実習メンバーの方々には、さまざまな困難に直面しながらも、なぜ諦めようとはしなかったのでしょうか。また、一年を通してひとりの他者とじっくりつきあうという調査

経験から、なにを得たのでしょうか。そしてその調査経験は、彼・彼女らの人生において、その後の社会生活において、どんな意味をもっているのでしょうか。

調査経験の社会的意味、調査と社会とのかわり、さらには社会科学と人間とのかわりについて考える、かっこの機会だと思います。(小倉)

## イベントの記録 (2)

2011年7月23日 於早稲田大学  
《盲ろう者へのインタビュー調査に挑む  
——通訳介助者から調査者へ》

話題提供：

松谷直美（日本社会事業大学大学院）

企画趣旨：

視力と聴力、両方に障害がある人々——盲ろう者。彼らの通訳介助者として長年支援活動に取り組まれている松谷直美さん。現在はその経験を生かし大学院にて盲ろう者支援に関する研究に取り組まれています。

今回は松谷さんに話題提供をしていただきます。

①盲ろう者への支援活動に取り組むようになったきっかけや思い。②なぜ支援活動だけにととまらず、調査研究が必要だと思ったのか。③支援者であり調査者であることの難しさと可能性。④盲ろう者へのインタビュー調査に挑んだ時のエピソードなど。

松谷さんには、支援活動や研究活動のプロセスにおける思いを語っていただきます。また「被調査者」でもある盲ろうの方や通訳の方にもおいでいただき、話題提供に加わっていただく予定です。

これまでのイベントと同じように、ただ報告者の話を聞くだけではなく、参加者どうし

が経験を持ち寄り意見を交換できるような会にしたいと考えております。(上村)

\* \* \* \* \*

## 調査・研究の記録 (1)

「共同研究「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラム」の全国レベルでの普及を目的とした実践研究にもとづく教材開発」（代表児玉桂子）に参加しました。

そのうち、「練馬環境づくりプロジェクトの統計分析1（調査表A：環境づくり前後の比較）」の部分を受け持ちました。

担当は松尾と深谷直弘（法政大学大学院社会学研究科博士後期課程）の2人で、実際の作業のほとんどを深谷が行ないました。

この調査の結果は9月24日25日にパシフィコ横浜において開催される予定の第12回日本認知症ケア学会大会で発表される予定です。

（児玉桂子・古賀誉章・沼田恭子・大久保陽子・深谷直弘・松尾浩一郎，2011，「施設環境づくり支援プログラムによる環境づくりの効果(2)——職員の環境満足度および認知症高齢者の行動への影響」)

児玉先生調査に参加して——報告と感想  
深谷直弘

昨年冬、お話をいただき、児玉先生の調査のお手伝いをさせていただきました。主な作業は、単純集計表の作成と基礎的な検定といった内容でしたが、大変貴重な経験となりました。

作業前や作業当初は、この調査のサンプルサイズや前提とする行為者モデルに関して自分の中で上手く消化しきれない部分もありました。頭の中では、納得していたのですが、

どこか感覚的に受け入れられなかったのです。これは、今から考えてみると、無知で恥ずかしいことなのですが、自分がこれまで学んできた社会学的社会調査をどこかで当然視しており、相対化できなかつたからだと思います。

社会調査は、社会学だけではなく、他領域の調査も含まれます。そして、それに準じた技法が存在します。改めてこう書くと、当たり前のことだと思われるかもしれませんが、実際に自分の領域外の調査と出会うとき、頭でわかっていたとしても、どこか納得できない自分がいました。暗黙のうちに技法が優先され、実際の調査データとの対話の部分が脇に置かれていたのです。

この経験を通じて、理解していても、感覚的に納得することは難しい、そのため調査者は、よりこうした側面を自覚して、データと向き合わなければならないということを学ばせていただきました。

最終的には、こうした違和感は、この作業を通じて解消されましたが、それは集計作業というデータの土台となる部分を担当したことが大きかったと思います。こうしたことを含めて、調査のお手伝いを通じて多くのことを学ぶことができました。これを糧に自身の社会調査に活かしていければと考えております。

## 会員関係

現在の正会員数は19名となっております。不定期で送付させていただいている電子メールでのニューズレターには、55名の購読者が登録されています。

役員は2010年9月に2年任期で就任した以下5名が新年度も継続して運営を担っていきます。あらためてよろしくお願い申し上げます。

代表理事 松尾浩一郎

副代表理事 後藤隆

理事 大島千帆、小倉康嗣

監事 上村勇夫

## 会費納入のお願い

会員の皆様には2011年度会費の納入をお願いいたします。年会費は1口3,000円です。同封した払込票は郵便局のATMなどをご利用になれます。ご協力いただければ幸いです。

口座名義 トクヒ) サーベイ

口座番号 00170-9-568148

昨年度の会計収支については8月に電子メールでお送りした決算書や活動報告書をご覧ください。

## 調査・研究の記録 (2)

財団法人国際交通安全学会より委託を受け、介護タクシーに関する調査を行なっています。3月末に中間報告を提出しました。担当は後藤と大島の2人です。

NPO サーベイ会報 第2号

2011年9月10日 発行

特定非営利活動法人サーベイ

[www.survey-npo.jp](http://www.survey-npo.jp)

151-0053 渋谷区代々木 2-27-16-902

[info@survey-npo.jp](mailto:info@survey-npo.jp)

